

「モンテネグロ語」の起源

社会主義ユーゴスラヴィアにおけるモンテネグロの言語を めぐる論争と言語イデオロギー（1960–1980年代）¹

中澤 拓也

はじめに

モンテネグロで多くの住民によって用いられる音声言語は、2007年にモンテネグロの憲法改正によって「モンテネグロ語」との名称が公式に定められたが、² 同時にセルビアやクロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナで話される音声言語と極めて近い関係にあり、相互にほぼ完璧な理解可能性を持つ。これらの言語——モンテネグロ語、セルビア語、クロアチア語、そしてボスニア語——が1つの言語なのか、それとも4つの言語なのかという問題は、本稿執筆時点においても未だに結論が出ていない。³ 本稿は現代におけるこの問題の思想的起源を、社会主義期の歴史を通して探究しようとするものである。

社会主義ユーゴスラヴィアでは、1954年⁴のノヴィ・サド合意 (Novosadski dogovor)

¹ 本稿は、拙稿“Коријен идеје црногорског језика: Језичка идеологија Војислава П. Никчевића у социјалистичкој Црној Гори,” *Studenckie Zeszyty Naukowe Instytutu Filologii Słowiańskiej* UJ 9 (2016), pp. 101-107 と重複する内容を含む。また、平成28年度鈴木・中村奨励研究員への研究助成、およびJSPS 科研費 17J04473 による研究成果の一部である。

本稿では、史料からの引用に際して適宜原綴を添えるが、史料に対格などに屈折させた形が用いられている場合は、日本語表現としては主格が相応しいような場合においても主格形には直さず、史料に現れる語形をそのまま原綴として表示する。

² 2000年代以降の「モンテネグロ語」の制度化について、詳しくは、拙稿『『モンテネグロ語』の創出——ユーゴスラヴィア解体以降の言語政策と言語状況（1992–2011）』『ことばと社会』第15号、2013年、180–206頁を参照。

³ 2017年には、4か国の言語学者が「共通言語に関する宣言」を発出し、これら4つの言語が実際には1つの言語であることを主張した。詳しくは、Ranko Bugarski, *Govorite li zajednički? Kako je nastala i kako je primjena Deklaracija o zajedničkom jeziku* (Beograd: Biblioteka XX vek, 2018) を見よ。

⁴ 筆者は過去の論文で1957年と書いたが、誤りである。お詫びして訂正する。拙稿『『モンテネグロ語』の創出』184頁；同「〈モンテネグロ語〉の境界——ユーゴスラヴィア解体以降の言語イデオロギーにおける『言語』の再編（2007–2011）』『境界研究』第4号、2013年、16頁。

によって、セルビア人・クロアチア人・モンテネグロ人⁵・ムスリム人⁶の4民族がセルビア・クロアチア語 (srpskohrvatski jezik) を共有するとされてきた。だが1960年代から1970年代にかけて、クロアチア語の独自性を主張する知識人たちがその枠組に異議申し立てを行い、1990年代に社会主義ユーゴスラヴィアが解体したことによって、セルビア・クロアチア語はそれぞれの「民族語」(ボスニア語、モンテネグロ語、クロアチア語、そしてセルビア語)へと分裂する。⁷ 本稿はこの過程のうち、特に社会主義期におけるモンテネグロの言語をめぐる論争に焦点を合わせ、言語学者や文献学者がどのように「モンテネグロの言語」を議論していたのか、そしてその背景にはどのような言語イデオロギーが存在したのか、という点について検討する。

社会主義期の言語問題については多くの研究が存在するが、⁸ モンテネグロにおける言語問題について割かれる紙幅はいずれも少ない。社会主義期におけるモンテネグロの民族問題 (crnogorsko nacionalno pitanje) は従来等閑視されてきたが、この時期に大学をはじめとした「モンテネグロ人」という民族の構築を支える制度的基盤が整備

⁵ モンテネグロ人は従来セルビア人の一部であると考えられており、その民族的独自性は社会主義政権下において初めて公認された。鈴木健太「結合と分離の力学——社会主義ユーゴスラヴィアにおけるナショナリズム」柴宜弘ほか編『東欧地域研究の現在』山川出版社、2012年、327–328頁。

⁶ ボスニア及びサンジャクに集住しセルビア・クロアチア語を母語とするイスラーム教徒 (muslimani) の地位は1960年代までは安定せず、ノヴィ・サド合意当時は民族として認定されていなかったが、1967年にティト (Tito) が彼らを6つめの民族と認め、翌年にボスニア共産主義者同盟はムスリム人 (Muslimani) を固有の民族であると決議し、そして1971年の国勢調査において選択肢に「ムスリム人」が導入された。彼らの法的地位は、最終的に1974年憲法によってムスリム人が構成民族として位置づけられたことによって確定する。詳しくは、佐原徹哉「ボスニアのムスリム・コミュニストにとっての宗教とネイション」酒井啓子・臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』東京大学出版会、2005年、79–102頁；長島大輔「人口調査の政治性——ボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人をめぐって」柴ほか編『東欧地域研究の現在』159–182頁。

⁷ 関連する研究を全て取り上げることはできないが、代表的な研究としてひとまず Robert D. Greenberg, *Language and Identity in the Balkans: Serbo-Croatian and Its Disintegration*, updated edition (New York: Oxford University Press, 2011); Snježana Kordić, *Jezič i nacionalizam* (Zagreb: Durieux, 2010) を挙げておく。

⁸ とりわけ重要なものとして、Ksenija Cvetković-Sander, *Sprachpolitik und nationale Identität im sozialistischen Jugoslawien (1945–1991): Serbokroatisch, Albanisch, Makedonisch und Slowenisch* (Wiesbaden: Harrassowitz, 2011); Слободан П. Селинић, *Србија и језички сукоб у Југославији 1967* (Београд: Институт за новију историју Србије, 2017) が挙げられる。

されたことから,⁹ 近年になって社会主義期の歴史研究が進展している。¹⁰ 言語をめぐるでも同様に、「モンテネグロ語」の正書法などが整備されたポスト社会主義期のみならず、「モンテネグロ語」の独自性が論じられる端緒となった社会主義期が調査される必要があるだろう。

かくのごとき研究状況の中で、ヴラディミル・ドゥロヴィチの論文「社会主義の調停」がモンテネグロの言語問題を中心に据えて検討した数少ない研究である。¹¹ ドゥロヴィチは文書館史料も用いて 1960 年代末から 1970 年代初頭の言語をめぐる論争について詳述しており、社会主義期の「モンテネグロ語」をめぐる問題を研究する上で重要な業績だが、1970 年代後半以降については触れられていない。しかし 1970 年代後半以降にも、ペシカンやニクチェヴィチ¹² ら後述する学者たちはモンテネグロ人の言語に関する論文を発表しており、モンテネグロ人の言語をめぐるイデオロギーを検討する上ではそれらをも検討することが必要であろう。また、1960 年代末から 1970 年代初頭に絞ったとしても、ドゥロヴィチの言及していない文献が存在する。本稿はそれらの文献を用いて先行研究の欠缺を埋め合わせ、社会主義期におけるモンテネグロ人の言語をめぐる論争についてより精緻な歴史像を描き出すことを目的とする。

1. 1960 年代後半から 1970 年代前半におけるクロアチアの言語をめぐる論争

本節では、以下の議論の前提として、1954 年のノヴィ・サド合意の内容を紹介した

⁹ それへの問題提起として、Siniša Malešević and Gordana Uzelac, “A Nation-State without a Nation? The Trajectories of Nation-Formation in Montenegro,” *Nations and Nationalism* 13:4 (2007), pp. 696–704; František Šístek, “Interpretace dějin Černé Hory na prahu 21. století,” *Slovanský přehled* 98:5 (2012), pp. 607–609 を参照。

¹⁰ 制度面に注目した研究として、Dragutin Papović, *Prilozi za istoriju nauke i kulture u Crnoj Gori 1945–1990* (Podgorica: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2015)がある。

¹¹ Vladimir Dulović, “Socialist Intercessions: The Earliest Demands for a Separate Montenegrin Language (1967–1972),” *History and Anthropology* 24:1 (2013), pp. 166–182. 目を 1990 年代以降に転ずると多くの先行研究が存在する。詳しくは、拙稿「『モンテネグロ語』の創出」181–182 頁を参照。それ以降に発表された研究も何点かあるが、ここでは最新のものの 1 つとして Tatjana Balažić Bulc in Vesna Požgaj Hadži, “Aktualna vprašanja standardizacije črnogorskega jezika,” v Đurđa Strsglavac in Namita Subiutto, ur., *Beseda premosti čas in prostor: Posvečeno Vladimirju Osolniku* (Ljubljana: Znanstvena založba Filozofske fakultete, 2018), pp. 97–109 を挙げるにとどめる。

¹² 1993 年に『モンテネグロ語正書法』を発表したことで、ニクチェヴィチの名は広く知られるようになった。1990 年代以降のニクチェヴィチの活動については、本稿の射程を外れるため別稿で扱うこととし、ここではアンドレア・トロヴェーヰの詳細な研究を挙げるにとどめる。Andrea Trovesi, “La codificazione della lingua montenegrina: Storia di un’idea,” *Studi Slavistici* 6 (2009), pp. 197–223.

後、1960年代後半に発生したクロアチアの記事語をめぐる論争について検討する。後ほど詳述するように、クロアチア語についての論争はモンテネグロの言語をめぐる論争に大きく影響しており、その構図を確認することは重要であるからである。

上述したように、1954年のノヴィ・サド合意は、「セルビア人、クロアチア人、モンテネグロ人の民衆語はひとつの言語である [Narodni jezik Srba, Hrvata, i Crnogoraca jedan je jezik]」¹³と定め、この言語をふたつの主要な中心——セルビアの首都ベオグラド (Beograd) とクロアチアの首都ザグレブ (Zagreb) ——に基礎をおいて発展した記事語であると位置づけた。また、この合意においてはイェ方言とエ方言¹⁴の平等、ラテン文字とキリル文字の平等、正書法の共有なども決められた。¹⁵これによって、セルビア・クロアチア語は共和国ごとに別々の変種が用いられると公式に定められたことになる。1960年には共通の辞書がマティツァ・スルプスカ (Matica srpska) とマティツァ・フルヴァツカ (Matica hrvatska) から発行された。こうして3民族の共通語としての「セルビア・クロアチア語」が制度化されたのだが、ほどなくしてそれは一部の学者からの異議申し立てを受けることとなる。

1960年代後半のクロアチアでは、分権化を求める勢力が共和国の主導権を掌握し「クロアチアの春」と呼ばれる状況が生まれた。そのような状況の中、1967年3月17日の『テレグラム (Telegram)』において、「クロアチア記事語の名称と地位に関する宣言 (Deklaracija o nazivu i položaju hrvatskog književnog jezika)」(以下「宣言」)が発表される。マティツァ・フルヴァツカやユーゴスラヴィア科学芸術アカデミー言語研究所 (Institut za jezik Jugoslavenske akademije znanosti i umjetnosti) などの団体が連名で発したその宣言では、民族の主権と完全な平等のためには自民族の言語を自民族の名称で呼ぶことが必要なのだと謳われ、連邦憲法における公用語を、当時のセルビア・クロアチア語、スロヴェニア語、マケドニア語の3言語から、スロヴェニア語、クロアチア語、セルビア語、マケドニア語の4言語にすることなどが要求された。¹⁶言語研究所は1970年に、各々の民族が自分の民族名で言語を呼ぶことをノヴィ・サド協定は保障しているとクロアチア人には解されてきたが、一部の中央集権的・統一主義的文獻

¹³ Henryk Jaroszewicz, *Jugosłowiańskie spory o status języka serbsko-chorwackiego w latach 1901–1991* (Wrocław: Wydawnictwo Uniwersytetu Wrocławskiego, 2006), p. 151.

¹⁴ 共通スラヴ語の*ǣに由来する母音の発音の差異に基づく分類。概ねセルビアがエ方言、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、そしてモンテネグロがイェ方言である。

¹⁵ Jaroszewicz, *Jugosłowiańskie spory*, pp. 151–152.

¹⁶ *Deklaracija o nazivu i položaju hrvatskog književnog jezika: Građa za povijest Deklaracije, treće izmijenjeno i dopunjeno izdanje* (Zagreb: Matica hrvatska, 1997), pp. 25–29.

学者たちの一団が「言語の併合とセルビア化を [unifikaciju i serbizaciju jezika]」¹⁷ 企てているという声明を発する。

1960年代後半にセルビア・クロアチア両共和国の言語学者によって交わされた議論について、以下では、ザグレブで発行されていた雑誌『言語 (Jezik)』を中心に検討する。

クロアチアの言語学者スティエパン・バビチ (Stjepan Babić) は、1967年に『言語』に掲載された論考で、クロアチアの文章語について「既に百年以上にわたってその名前を [われわれは] 探求してきたが、今日に至るまでそれは見つけられていない」¹⁸ と述べ、戦後にマケドニア語がセルビア語とは異なる独自言語として認定された例を引き合いに出し、独自の文章語として「クロアチア語」を持つ権利を主張した。

いっぽうでクロアチアの言語学者ボジダル・フィンカ (Božidar Finka) は、ボスニアやヴォイヴォディナのような多民族地域においてはセルビアやクロアチアとは違った変種が形成されており、民族別に言語を区分するのは不相当だと論じた。¹⁹ セルビアの言語学者パヴレ・イヴィチ (Pavle Ivić) は、セルビア・クロアチア語の内部での平等はスロヴェニア語やマケドニア語といった他言語とのあいだの平等とは性質が異なると述べた。彼によれば、セルビア人やクロアチア人は、

[……] 今日の条件の下では、彼らは諸変種が共通言語の領域的実現として解釈される限りにおいてのみ十全な実際の平等を謳歌できる、民族的個別性として [解釈されるの] ではなく。²⁰

のであった。彼はまた、「提案されているわれらが文章語の2つ——『クロアチア語』と『セルビア語』——への分裂はわれらが祖国の数百万の住民に著しい言語的不平等をもたらすだろう」²¹ と主張し、「宣言」に反対する姿勢を見せた。また、言語学の知見に基づき、クロアチアを単一の言語的領域とみなすことは「非科学的」として批

¹⁷ “Institut za jezik JAZU o Novosadskom dogovoru,” *Jezik* 18:5 (1970), pp.139. 「統一主義」という、戦間期ユーゴスラヴィアにおける国王独裁と中央集権化を想起させる言辭は、既に1960年代中葉からクロアチアの急進的な言語学者のあいだで「セルビア・クロアチア語」を指すのに使われていた。Jaroszewicz, *Jugoslovańskie spory*, p. 72.

¹⁸ Stjepan Babić, “Htjenja i ostvarenja Novosadskoga dogovora,” *Jezik* 15:1 (1967), p. 3.

¹⁹ Božidar Finka, “I jedinstvo jezika i književne varijante,” *Jezik* 14:3 (1966), pp. 74–75.

²⁰ Pavle Ivić, “Za ravnopravnost, a protiv cepanja jezika,” *Jezik* 16:4 (1968), p. 119.

²¹ Isto, str. 125. のちにイヴィチを含むセルビアの言語学者は、クロアチア共和国に居住するセルビア人を例に挙げて「クロアチア語」の独立を批判する公開書簡を発している。“Лингвисти о језику,” *Политика*, 7. октобар 1971., p. 6.

判する者もいた。²²

これに対してバビチは、なぜセルビアの言語学者はスロヴェニア語のことに口を出そうとしないのにクロアチア語のことは介入したがるのか、とイヴィチに反論する。「スロヴェニア人が自らの言語的表現への権利を持つのに、クロアチア人は持たないのか？」²³とバビチは問いかけ、言語の名称に民族名を使う権利を強く擁護、「[私は]他民族に言語規範を定める権利を渡さない」²⁴と主張した。

ここでの争点は、セルビア・クロアチア語を一体性のある単一の言語とみなすか、²⁵セルビア語とクロアチア語は似通ってはいても別々の言語かという点にあり、前者は共和国の境界と民族分布が一致しない点を理由に、単一の言語を共有することで民族間の平等が達成できるとした。いっぽう後者を支持する論者は、民族的権利として言語呼称を論じ、「自分たちの」言語を自民族の名で呼ぶことは当然の権利だと主張した。いずれの側も、民族の権利あるいは諸民族の平等という社会主義ユーゴスラヴィアにおける民族イデオロギーに則って立論していたことがわかる。

ドゥロヴィチによれば、ティト (Tito) らユーゴスラヴィア共産主義者同盟 (Savez komunista Jugoslavije) 首脳部は、上述のようなクロアチアの状況がボスニアやモンテネグロに波及することを憂慮していた。²⁶ 実際には彼らが憂慮したような激しい運動はモンテネグロでは発生しなかったが、『言語』や『批評 (Kritika)』といったクロアチアの雑誌を中心に、モンテネグロの言語の独自性をめぐる議論が展開されることになる。次節以降ではその問題を扱いたい。

2. 1960年代末から1970年代初めにかけての議論

1968年、モンテネグロの文献学者ヴォイスラヴ・P・ニクチェヴィチ (Vojislav P. Nikčević) は「ニェゴシュ²⁷以前の時代のモンテネグロ文学における民衆語」という

²² たとえば、ゾラン・グルンチェヴィチがセルビア文学者協会の機関紙『文学新聞』に寄せた論考を参照。Зоран Глушчевић, “Језик наш насушни,” *Књижевне новине*, 4. јануар 1969., С. 2.

²³ Stjepan Babić, “Za ravnopravnost, ali čega?” *Jezik* 16:5 (1968), p. 139.

²⁴ Babić, “Za ravnopravnost, ali čega?”, p. 147.

²⁵ イヴィチによる「セルビア・クロアチア語」の一体性をめぐる議論については、Селинић, *Србија и језички сукоб*, С. 57 も参照。

²⁶ Dulović, “Socialist Intercessions,” p. 171. 「クロアチアの春」は最終的には急進化への懸念からティト自らが介入し鎮圧されることになる。

²⁷ ペタル2世ペトロヴィチ=ニェゴシュ (Petar II Petrović-Njegoš), 通称ニェゴシュは19世紀にモンテネグロを統治した主教公であり、『山の花輪 (*Gorski vijenac*)』などの叙事詩で知られている。彼はモンテネグロで最も著名な歴史上の人物であり、様々な陣営から正典化の対象となってきた。詳しくは、Boban Batrićević, *Bog našeg nacionalizma: Recepcija, reinterpretiranje i korišćenje*

論文を、ちょうど上述したクロアチア語の地位をめぐる論争の渦中にあった『言語』誌に発表した。ニクチェヴィチはその論文の結論において「今日のモンテネグロの全領域におけるニェゴシュ以前の時代の民衆語における文学的伝統はモンテネグロ文化・文学の過去の意義深い時代をあらわしている」²⁸と述べた。つまり、モンテネグロが歴史的に統一された領域であり、その言語は他の地域の言語とは異なった伝統を持つ、と言明したのである。

これに異論を唱えたのがアレクサンダル・ムラデノヴィチ (Aleksandar Mladenović) だった。モンテネグロ出身のムラデノヴィチは彼の「非科学的で不正確な解釈」²⁹を批判した。なぜなら、ムラデノヴィチによれば、セルビア、ヴォイヴォディナ、モンテネグロの3地域は共通の文語を用いてきたからである。³⁰これに対しニクチェヴィチは、ムラデノヴィチの批判を「非歴史的」³¹なものとして斥け、モンテネグロ独自の「型」の存在を主張した。³²

ムラデノヴィチとの議論と並行して、ニクチェヴィチはこちらもモンテネグロ出身の言語学者ミタル・ペシカン (Mitar Pešikan) に議論を挑んでいた。ペシカンはモンテネグロの首都ティトグラード (Titograd) で刊行されていた文化・芸術誌『創造 (Stvaranje)』に寄せた論文で、モンテネグロ人の言語を指す最良の名称は「セルビア・クロアチア語」だと主張したのだが、³³それをうけてニクチェヴィチは『批評』に「ミタル・ペシカン博士の言語政治」³⁴と題する論文を発表し、ペシカンを名指して批判した。

Njegoševa lika i djela u političkoj propagandi i diskursu vlasti u Crnoj Gori od 1851. do 2013. godine (Podgorica: Nova Pobjeda; Cetinje: Fakultet za crnogorski jezik i književnost, 2018)を参照せよ。

²⁸ Vojislav Nikčević, “Narodni jezik u crnogorskoj književnosti prednjegoševog doba (svršetak),” *Jezik* 16:2 (1968), p. 52.

²⁹ Aleksandar Mladenović, “Neka nenaučna tumačenja o narodnom jeziku prednjegoševske književnosti,” *Jezik* 16:5 (1968), p. 152.

³⁰ Aleksandar Mladenović, “Još jednom povodom nekih naučnih tumačenja o narodnom jeziku prednjegoševske književnosti,” *Jezik* 17:5 (1969), p. 158.

³¹ Vojislav Nikčević, “Neka neistorijska tumačenja narodnog jezika u crnogorskoj književnosti prednjegoševskog doba,” *Jezik* 17:2 (1969), p. 52.

³² Vojislav Nikčević, “Još jednom o nekim neistorijskih tumačenja narodnog jezika u crnogorskoj književnosti prednjegoševskog doba,” *Kritika* 17 (1971), p. 253.

³³ Митар Пешикан, “Црна Гора и питања српскохрватског књижевног језика,” *Стварање* 23:4 (1968), С. 356. サライェヴォの『響 (Odjek)』に寄せた論考でも同様の議論を行なっている。Mitar Pešikan, “Varijante u našem standardnom jeziku,” *Odjek* 21:1 (1968), p. 4.

³⁴ 原語の“jezikoslovna politika”は現代の社会言語学においては「言語政策」を意味する語だが、ここでは1960年代後半の強く政治色を帯びた論争において論敵に向けられた語であるという事情から「言語政治」と訳した。

ニクチェヴィチは、ペシカンがモンテネグロの作家をセルビアの作家であるかのよう
に扱い、「モンテネグロの言語変種をセルビア変種のイエ変種であるかのように扱っ
ている」³⁵ ことを非難する。そして批判対象はペシカンのみならず、ノヴィ・サド合
意に基づく言語政策全体へと及んだ。彼によれば、「セルビア・クロアチア語」のごと
き呼称は「脱中央集権化・脱国家主義化するわれわれの社会的政治的生活の諸条件に
おいて [……] 覇権主義的性格を示唆」しており、「モンテネグロ民族とその最も本質
的な精神的特徴に害をもたらず」ものなのである。³⁶ ニクチェヴィチは論文を次のよ
うに結ぶ。

モンテネグロ人、セルビア人、クロアチア人、そしてボスニア・ヘルツェゴヴィナの民
衆の言語の一体性は一般言語学の業績の中にのみ存在する。19世紀にイエ型の新シュト方
言を文語の基盤にしたとき、われら諸民族は言語的に接近したが、しかし最後まで「接近
したわけ」ではなかった。もっとも、躍動的な言語的發展によるあらゆる民族の特別な民
族的特徴のために、完全な一体性は実現しえないのだが。[……] これによりモンテネグロ
人、セルビア人、クロアチア人、そしてボスニア・ヘルツェゴヴィナの民衆の言語はモン
テネグロ語あるいはボスニア・ヘルツェゴヴィナ語であるよりもセルビア語あるいはクロ
アチア語であるなどということは決してない。[……] あらゆる民族の呼び名を寄せ集めた
呼称が長さゆえに不便だとしても、それはモンテネグロ人がみずからの名を、実存を、己
の名残や自身についての言及を犠牲にする理由にはならない。[……] しかしながらもしも
そのような「中立的な」呼称を見いだせないとするならば、われわれにはすべての民族が
みずからの言語変種へのみずからの自然権に従ってみずからの民族的名称で呼ぶ以外に
何も残されてはいない。³⁷

ニクチェヴィチはここで、「セルビア・クロアチア語」あるいは「クロアチア・セル
ビア語」という名称がモンテネグロを疎外していると主張し、民族名が言語名に反映
されるべきであることを主張している。翌年の『創造』に載せた論説でも、ニクチェ
ヴィチは強力に「みずからの民族名に基づいて」言語を呼ぶ権利を要求する。

[……] そして今日、いまだなお1960年以来の正書法が力を持ち、非公式の使用におい
てセルビア人が「みずからの」言語をセルビア語と、クロアチア人がクロアチア語と呼ん

³⁵ Vojislav Nikčević, “Jezikoslovna politika doktora Mitra Pešikana,” *Kritika* 8 (1969), p. 589.

³⁶ Isto, p. 592.

³⁷ Isto, p. 593.

でいるときに、なぜモンテネグロ人がみずからの言語をみずからの民族名で[националним именом]呼ぶことができないのはなぜか[という主張]を見かけることはない[……]³⁸

さらに続けて、セルビア語とクロアチア語は言語学的に独自の言語ではないにせよ、変種の次元での言語的個別性を有しており、それゆえにセルビア人とクロアチア人は言語をその民族名で呼ぶことができるとニクチェヴィチはいう。そして「モンテネグロ人はこの基盤の上でみずからの言語を、言語学的に個別の言語ではなくとも、みずからの民族名で呼ぶことができる」³⁹と主張するのである。ニクチェヴィチは19世紀に言語標準化を主導したヴーク・カラジチ(Vuk Karadžić)を「モンテネグロ語[црногорски језик]を、他の南スラヴ諸民族の諸言語のように」⁴⁰セルビア語と呼んだとして批判した。そして『批評』に掲載した別の論文「いわゆるヴークの言語は誰のものか」において、ニクチェヴィチはモンテネグロが「ひとつの言語的空間[jednu jezičku sferu]」⁴¹であるとして、モンテネグロが言語的に一体性を持った存在であると論じる。これは、言語に民族名を冠する権利を要求するバビチら「クロアチア語」支持派知識人の論理と軌を一にしている。

これに対し上述のイヴィチは、「そんなに早くモンテネグロが統一された領域[jедина област]ではないことを忘れる必要はない」⁴²として、モンテネグロの領域には2方言(東ヘルツェゴヴィナ方言とゼタ方言)があり、モンテネグロ全土を覆う方言域は存在しないと指摘した。イヴィチはセルビア・クロアチア語圏の方言学で名を知られた学者であり、⁴³その見解によれば、モンテネグロ共和国の北西部はヘルツェゴヴィナ地方と共通の方言域をなし、サンジャク地方から古モンテネグロ(Stara Crna Gora)まで連なる方言域とは異なっている。これらの方言域の境界線はモンテネグロの領域を分断しているだけでなく、他共和国の領域(ヘルツェゴヴィナ、サンジャク北部)にも同系の方言が分布しており、したがってモンテネグロは単一の言語的領域とはいえない、というのである。ペシカンもまた、モンテネグロの方言に豊富な研究蓄積があ

³⁸ Војислав Никчевић, “Ко лаички гледа на проблеме језика?” *Стварање* 25:10 (1970), С. 942.

³⁹ Никчевић, “Ко лаички гледа,” С. 943.

⁴⁰ Никчевић, “Ко лаички гледа,” С. 940.

⁴¹ Vojislav Nikčević, “Čiji je takozvani Vukov jezik,” *Kritika* 12 (1970), p.384.

⁴² Павле Ивић, *Српски народ и његов језик* (Београд: Српски књижевна задруга, 1971), С. 219.

⁴³ 彼の業績および言語学の研究史上での位置づけについて日本語で紹介したものとして、中島由美「ことばからみた旧ユーゴスラヴィアの一側面——『セルビア・クロアチア語』をめぐって」『一橋論叢』第124巻4号、2000年、470頁がある。

ることを指摘した上で、⁴⁴ イヴィチを参照しながらモンテネグロの領域を複数の方言域に分割する。⁴⁵

ここまでの議論から、1960年代末から1970年代初頭にかけてのモンテネグロの言語をめぐる議論は、同時期のクロアチア語をめぐる議論に影響を受けていたことがうかがえる。クロアチアでの議論と同じく、そこでの争点となったのは「自民族の名称で言語を呼ぶ権利」が認められるか否かであった。

クロアチアの事例と異なるのは、言語呼称への権利を訴える側に対して、民族間の平等といった観点から反論がなされるのではなく、まず方言区画といった「純粋に」言語学的な論点が持ち出された点である。これは、クロアチア共和国の領域には無視できない数のセルビア人が居住しており、セルビア・クロアチア語からクロアチア語が分離することは彼らに影響を及ぼすことになるのに対して、当時のモンテネグロにおいては最大の少数派は北部のムスリム人であり、セルビア人もクロアチア人もさして多く居住していなかったため、⁴⁶ 言語名称の問題と民族間の平等という問題とが直接的には関連しなかったのだらうと推測できる。

本節で検討したような相互を名指して行われる「熱い」議論には注目が集まりやすいが、1970年代後半には、このような激しい論争は、少なくとも言語をめぐる影を潜めることとなった。とはいえそれは言語をめぐるイデオロギー上の問題が消失したことを意味するわけではなく、上述の論争に参加した知識人たちはそれぞれ自説に基づく論文を生産し続けることになるのである。次節では、本節で検討した論争の参加者たちが、1970年代後半以降においてどのような論説を発表していったかを検討する。

3. 1970年代後半から1980年代にかけての議論

本節では、前節で扱った論争の参加者のうち、特に1970年代後半以降のペシカンとニクチェヴィチの言説を辿る。この時期、ニクチェヴィチはニクシチ (Nikšić) のモンテネグロ大学哲学部に職を得、モンテネグロを拠点として文献学の分野で多くの論文を発表していた。いっぽうでペシカンも言語学の分野で論文執筆を続けており、その

⁴⁴ Митар Пешикан, “Стање проучавања црногорске говорне зоне и даљи задаци,” *Зборник Матице српске за филологију и лингвистику* 13:1 (1970), С.185–186.

⁴⁵ Пешикан, “Стање проучавањ,” С.193–194.

⁴⁶ モンテネグロにおいてセルビア人が最大の民族的少数派となるのは社会主義ユーゴスラヴィアの解体以降である。詳しくは、久保慶一「モンテネグロにおける独立問題と民族アイデンティティ」『ロシア・東欧研究』第33号、2004年、69–79頁を参照せよ。

中にはモンテネグロの言語について触れたものが何点か存在する。以下では先行研究では触れられてこなかったそれらの論説を取り上げ、1970年代後半から1980年代にかけての言語イデオロギーの展開について検討する。

まずペシカンについてみてみよう。彼は1979年の論文「モンテネグロの諸口語への一考察」において、

こんにちのモンテネグロ社会主義共和国の領土はセルビア・クロアチア語、すなわちシュト方言の領域において個別の方言区画をなしてはいない。[……]⁴⁷

と断言し、モンテネグロを大きく3つの方言域に区分⁴⁸、モンテネグロ全土を覆う単一の方言域を認めない立場を貫いた。1984年の論文でも、彼はこのようなモンテネグロの諸方言の分類を支持している。⁴⁹ ペシカンの立場は、概ね1960年代後半の論争時と変わらないものだったといえるだろう。

ニクチェヴィチについて検討する前に、1980年に起きた論争について簡単に触れておく。この年、モンテネグロ出身の民族学者シュピロ・クリシチ (Špiro Kulišić) が『モンテネグロ人の民族起源について』という著書を発表し、⁵⁰ その中でモンテネグロ人とセルビア人は共通の民族的起源を持たないと論じたことから、⁵¹ クリシチの起源論を支持する学者と反対する学者のあいだで、モンテネグロ共産主義者同盟中央委員会も巻き込んだ議論に発展した。⁵² ニクチェヴィチはこの議論に参入し、クリシチの起源論

⁴⁷ Митар Пешикан, “Један општи поглед на црногорске говоре,” *Зборник Матице српске за филологију и лингвистику* 22:1 (1979), С.149.

⁴⁸ Пешикан, “Један општи поглед,” С.168–169.

⁴⁹ Митар Пешикан, “Правци диференцирања и класификације црногорских говора и неки проблеми њиховог проучавања,” у *Црногорски говори: Резултати досадашњих испитивања и даљи рад на њиховом проучавању* (Титоград: Црногорска академија наука и умјетности, 1984), С.49–56.

⁵⁰ Špiro Kulišić, *O etnogenezi Crnogoraca* (Titograd: Pobjeda, 1980).

⁵¹ セルビア人とモンテネグロ人は共通の民族的起源を持つが、別々の国家を持ったことで別々の民族へと発展した、というのが当時の正統的な歴史認識であった。

⁵² クリシチの起源論をめぐる議論については、本稿の射程を外れるので別稿で論じることとする。ここではひとまず、Gordana Gorunović, “On a Not So Well Tempered Marxism: Ideological Criticism, Historical Reconstructions, and a Late Return to Ethnogenesis in the Work of Špiro Kulišić,” in Vintilă Mihăilescu et al. eds., *Studying Peoples in the People’s Democracies II: Socialist Era Anthropology in South-East Europe* (Halle: Lit, 2008), pp.307–335; Saša Nedeljković, *Čast, krv i suze: Ogledi iz antropologije etniciteta i nacionalizma* (Beograd: Zlatni zmaj, 2007), pp.72–91; Magdalena Reksć, “Teorije o etnogenezi Crnogoraca i njena politizacija,” *Njegoševi dani* 3 (2011), pp.419–431 を参照されたい。

を擁護する論陣を張っただけでなく、⁵³ 精力的にみずからの「モンテネグロ語」および「モンテネグロ文学」観を発表していく。以下では1980年代以降のニクチェヴィチの論説を検討対象としたい。

論争から間もない1983年の論文において、彼は

最古のモンテネグロの口承創作はモンテネグロ民族の [црногорскога народа] 最初の勃興と発展にその起源を有していた。時代区分的な意味においてモンテネグロ人の言語とモンテネグロ文学の歴史におけるその段階はドゥクリャ時代として知られている。⁵⁴

と書き、モンテネグロの言語的独自性の起源を古代のドゥクリャ (Duklja) にまで遡る。ここからは、モンテネグロ人およびその言語の起源についての極めて本質主義的な理解が見て取れる。

このような理解は後の論文にも一貫して見られる。翌年の論文では、ヴークやアレクサンダル・ベリチ (Aleksandar Belić) のような過去の言語学者が、モンテネグロ人の言語を「方言 [дијалектизме]」や「地方語 [провинцијализме]」と呼んだとして非難の対象となった。⁵⁵ ニクチェヴィチはそのような「脱民族化 [денационализације]」⁵⁶ を、モンテネグロ人の言語の価値を貶めるものと位置づける。また1988年の論文では、19世紀にモンテネグロの口承文芸を調査したヴークが、その言語をセルビア人の民族名称で呼んだのだと指摘した。⁵⁷ つまりニクチェヴィチにとっては、モンテネグ

⁵³ クリシチの著書に対するニクチェヴィチの発言は、Војислав Никчевић, “О неким питањима етногенезе Црногораца,” *Пракса*, бр.4 (1981), С.91–100; Војислав Никчевић, “Вриједна књига о Црногорцима (Поводом студије *О етногенези Црногораца* Шпира Кулишића, Побједа, Титоград 1980),” *Библиографски вјесник* 10:1 (1981), С.127–137; Војислав Никчевић, “Етногенеза Црногораца (Поводом студије *О етногенези Црногораца* Шпира Кулишића, Побједа, Титоград 1980),” *Овдје* 140 (1981), С.19 を見よ。またこれ以降、ニクチェヴィチはモンテネグロ人のみならず、クロアチア人やスロヴェニア人の民族起源についても活発に論説を発表していくことになる。詳しくは別稿で論じるが、ここではひとまず Vojislav P. Nikčević, “Srednjovjekovna etnogeneza Hrvata,” *Dubrovnik* 32:5–6 (1989), pp.30–57; Vojislav Nikčević, “Slovenci so Slovani: Ob razpravah o etnogenezi Slovencev in njihovih prikazih v hrvaškem in srbskem tisku,” *Delo*, 17. oktober 1985, pp.8–9 を参照されたい。

⁵⁴ Vojislav Nikčević, “Tragom najstarijeg crnogorskog usmenog književnog nasljedja,” u *Zbornik 1. kongresa jugoslovenskih etnologov in folkloristov* (Ljubljana: Slovensko etnološko društvo, 1983), p.249.

⁵⁵ Војислав Никчевић, “Како се Црногорцима укида језик,” *Овдје* 183–184 (1984), С.29.

⁵⁶ Никчевић, “Како се Црногорцима укида језик,” С.29.

⁵⁷ Војислав Никчевић, “Вукова реформа језика и правописа и Црногорци,” *Обележја* 18:1 (1988), С.26–27. ニクチェヴィチのヴーク観については、他に Војислав П. Никчевић, “Вук и црногорска усмена епика,” у *Zbornik radova: XXXIV kongresa Savaza udruženja folklorista Jugoslavije* (Tuzla:

ロ人の言語は本来セルビア語とは別の言語なのだが、セルビア人の言語学者によって誤ってセルビア語の方言とみなされてきたのである。

モンテネグロ人の言語には本質的な特徴があるという見解は、ニクチェヴィチが1960年代後半の議論においても持ち出していたものだった。民族起源をめぐる論争が起きた1980年代以降になるとその本質主義的傾向はますます強まっていったことが本節での検討から看取できる。

ここまでの検討から、1970年代後半以降においては、モンテネグロの言語をめぐる1960年代後半の議論における対立軸が固定化されたことが読み取れた。最後に以上までの議論をまとめたい。

おわりに

1992年にセルビアとモンテネグロがユーゴスラヴィア連邦共和国を結成してからほどなくして、ニクチェヴィチは『モンテネグロ語正書法』を発表する。それ以降の言語問題についてはこれまで多くの研究が積み重ねられてきたが、それに先立つ社会主義期の言語問題は、ドゥロヴィチの研究を除いてこれまで等閑視されてきた。

本稿は、最初に1960年代後半の「クロアチア語」をめぐる論争を検討した上で、「モンテネグロ語」をめぐる社会主義期の議論に光を当てた。本稿での検討からは、モンテネグロの言語を「モンテネグロ語」と呼ぶべきだと主張した論者は、同時代のクロアチアにおける議論から影響を受けていたことが明らかになった。また、その議論が、当初は「民族の権利」という論拠に立脚していたこと、そして時代が下るにつれて本質主義的な論拠が用いられる傾向が強まっていったことも確認した。

「はじめに」で述べたように、「モンテネグロ人」という民族の存在が制度化され、モンテネグロ民族の権利に立脚する形で国家機構が整備されたのは、社会主義期が初めてのことである。モンテネグロの言語をめぐる議論はこのような社会主義期における民族の制度化を契機として発生しており、現代における「モンテネグロ語」をめぐる問題の直接的な起源は社会主義期に求められると見てよいであろう。

Udruženje folklorista Bosne i Hercegovine, 1987), C.53–58 も参照せよ。